

## 子どもの学び支援団体を支援！

ベネッセこども基金の

助成事業に期待すること



設立後すぐスタートした助成事業について、立ち上げ時からご指導いただいていたお二人と、助成先の団体の代表の方にお話をうかがいまし

た。5年間の活動が可視化でき、各団体の成果共有の仕方など早期に改善できる点と、今後挑戦すべき課題を確認する機会となりました。

写真提供 a：岡山子育て応援団バピママ b：c：(公社) こどものホスピスプロジェクト



# オンライン対談

Online Conversation

理事長(あいさつ)

特集1 5年間のヒストリー

特集2 「助成事業」

特集3 「自主事業」

活動概況

自主事業・助成事業

決算報告

財団概要

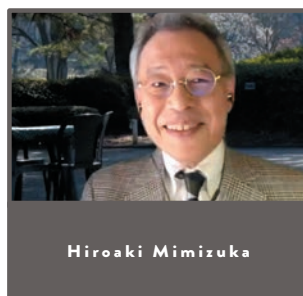
JCNE 業務執行理事

## 山田泰久氏

一般財団法人非営利組織評価センター 業務執行理事  
日本財団で長らく福祉領域の業務に携わる。元NPO法人CANPANセンター代表理事を経て現職。



Yasuhisa Yamada



Hiroaki Mimizuka

理事兼助成選考委員長

## 耳塚寛明氏

ベネッセこども基金理事兼選考委員長  
国立教育研究所研究員、お茶の水女子大学理事・副学長などを経て、現在青山学院大学コミュニティ人間科学部学部特任教授。専攻は教育社会学。

—お二人は、ベネッセこども基金が助成事業を立ち上げた当時の状況をよくご存知かと思います。最初の印象とこの5年間の活動について感じたことをお聞かせください。

### 「子どもの学び」というテーマに特化したユニークな助成

**山田氏** 前事務局長の龍さんにお声掛けいただき、助成事業をはじめるときにご相談にのりました。ベネッセこども基金の助成事業の最大の特徴は、テーマ特化型という点です。5年前は子どもの貧困が社会課題化したときで、多くの団体が取り組もうとしていたところでした。助成財団が自分たちの課題意識に応えてくれたと感じ、勇気づけられたと思います。子どもの貧困という分野の中でも、「子どもの学び」に着目し、それを軸としたテーマ特化の助成ができたことは、新しい形でしたね。

**耳塚氏** 設立当初から助成事業に選考委員として関わっていました。最初にはじめた「経済的困難の学習支援」は自身の研究内容の延長にあり、必然性をすんなり理解しました。「子どもの学び」に焦点を当てる方針は明確にあり、今後も軸になるところです。財団の理事の立場からすると、奨学金など子どもと家庭を直接支援するのではなく、子どもたちを支援する団体に対して助成する枠組みにしたのがよかったと思います。そのほうが、より多くの人々に影響をもたらす、ムーブメントを生み出すことができるからです。その意味でも、問題提起やユニークな視点を含み、他団体のモデルとなるような事業を選考するという点を重視しています。

### ニーズや事業の分析の積み上げによって、徐々に支援の方向が明確に

**山田氏** 初期の頃は恐る恐る作ったような募集要項や申請書のように思えました(笑)。当初は、どんな団体が申請してくるのが予想がつかずに間口を広くして募集していたのが、徐々に対象が具体的にわかりやすい形になってきたと思います。この5年間で、NPOの実情やニーズの分析が進み、助成プログラムを進化させたのです。特に最近の申請書は、助成事業によって団体や活動がどのように成長するかのポイントを表現できるようになっており、申請書そのものが申請団体にとって過去を振り返り、これからを考えるよいフレームワークになっているのではないのでしょうか。またどういう視点で選考したかを総評でわかりやすく公表されていることもとてもよいことです。申請する団体自体がベネッセこども基金の助成に合うかどうかを自己判断できます。

**耳塚氏** 確かにプログラムの変わり方は人間の成長のようであり、ベネッセこども基金がどういうところに力点を置いて支援をしていきたいのかが徐々に明確になってきたといえます。現在では他の団体のモデルになりそうな活動、例えば団体間の横連携に重点を置く、実践知を一般的な形に明文化するなどの視点をもった団体を発掘して助成することができるようになりました。

### 交流会など、助成金だけでなく団体支援に価値あり

**耳塚氏** 5年間で振り返り、特に大きかったのは助成団体間の交流会の存在。活動の共有や将来的な方向性の話ができている。また、事務局スタッフが団体と対話的な関係を維持しているという点は長所といえます。ニーズや課題を拾い上げていくことを地道にやることは、ベネッセこども基金の成長にもつながっているでしょう。



**山田氏** 交流会で、非営利組織評価センターの組織評価の仕組みを使った研修をさせていただきました。経営や組織運営の状況を共有し、課題確認ができる基盤強化の集合研修があるのも面白いし、代表だけでなく現場の方など複数人が参加できる形は非常によい取り組みです。助成プログラムは、単に資金的支援だけではなく、プラスアルファの支援が必要です。助成中の団体のイベント情報の紹介などは、もっと発信してほしいです。

## 助成によるモデルづくりは、 中間支援団体として重要な役割

**耳塚氏** 気になった点としてあるのが、まだまだ事業の継続性の点で課題を抱える団体が多く存在するという点です。なにかヒントをいただければ。

**山田氏** どの助成財団も助成先団体が自立することへの支援の具体策がないところが多く、またベネッセこども基金が扱っているテーマは自立することが難しい領域であるとも思います。まずは団体の自立に関する成功したノウハウや事例を蓄積し、他にフィードバックすることですよね。そして、対象とするテーマをいかに国や自治体の政策にもっていかです。実績を作って国にもっていき、制度化していくことが、ベネッセこども基金がテーマを絞って活動していることの意義だと思います。

**耳塚氏** おっしゃるとおりで、民間の財団が支援を継続するといっても限りがあります。ベネッセこども基金は「つなぎ役」として存在し、助成した団体が実績を積み上げ、それを社会に発信し、活動の重要性をアピールし、それを受けて行政が公的プログラムをスタートしてくれるといいなと考えてきました。NPOの中には意識的に

政策提言に取り組んでいるところが現れています。そういう全国的にもモデルとなりうる団体に支援をするということも重視している点です。

**山田氏** 助成財団の役割として、支援を「次につなげていく」のはとても大事ですね。病院などで病気療養中の子どもを支援する団体である認定NPO法人ポケットサポートさんにお話を

中長期的な成果の  
確認を期待します！

きく機会がありましたが、最初は病院からの受け入れが難しかったのが、ベネッセこども基金のような外部から支援を受けたことが信頼につながり、活動の流れができたと言っていました。テーマ特化して複数年助成をし、団体が実績を作って地域の中でも支援の枠組み作りができていたと感じました。モデルづくりの実践例ができていますね。

——最後にこれから期待することをお願いいたします。

## 公的制度化を目指して、 団体の成果の可視化が必要

**山田氏** さきほども話が出たように、公的制度に結びつけるためには、評価を活用し、エビデンスに基づいた施策、つまりどういう手法でどういう成果が出て、受益者の環境をどう変えたか、という成果を見せていくことが大切です。

**耳塚氏** 活動の社会的な認知を高めることも重要です。成果を可視的な形、つまりデータで示すことは不可欠です。子どもの貧困が社会問題として認知されるようになってから、たくさんの団体が支援活動を行ってきました。支援を受けた子どもたちは今どうしているのでしょうか。例えば追跡調査を行うのはどうでしょうか。「支援を受けた子たちはどうなったか」を社会に向けて示す時期にきたのではと思います。

**山田氏** 中長期的な成果を見ていくことは助成財団の弱いところですが、現場もデータベースなども整備されてきているので、ぜひベネッセこども基金がリードして明らかにしてほしいと思います。

## 助成財団としての モデルづくりにも期待！

**山田氏** 評価といえば、日本には複数年の助成プログラムはあまりありません。ベネッセこども基金の取り組みは社会実験ともいえるので、複数年の取り組みによって事業がどのようになったか、助成プログラム自体の評価をぜひ行ってほしいです。また、資産家が財団をつくることが増えていますが、ベネッセこども基金の取り組みが新しく財団をつくる際のモデルになると、日本の助成財団が進化します。

**耳塚氏** 助成する団体に対してモデル性を求めてきました。けれども、私たちベネッセこども基金自身が、モデル性をもった活動をしているかが問われていると思います。

助成団体を代表して、連続5年間「重い病気を抱える子どもの学び支援助成」に採択された認定NPO法人ポケットサポート代表理事の三好さんにお話をうかがいました。

## 自分たちがやってきたこと、 やりたいことをそのまま応援してくれる!



### 認定NPO法人ポケットサポート 代表理事 三好祐也さん

義務教育の多くを病院で過ごした体験のもと、岡山大学時代より院内学級でボランティアを行い、2015年長期療養中の子どものためのNPO法人を立ち上げ、2019年認定NPO、非営利組織のためのグッドガバナンス認証を取得。

### 認定NPO法人ポケットサポートとは

長期の入院や療養によって、学習や体験の機会を失ってしまう子どもたちの機会損失の空白(ポケット)を支援(サポート)する団体。長期入院や療養中の子どもたちへの学習や復学、自立支援を行う「環境をつくる」、当事者や家族の「生きる力を育む」、理解者や支援者を増やし関わる人たちをコーディネートする「人や気持ちをつなぐ」の3つをミッションに「病気を抱える子どもが将来に希望をもち自分らしく暮らせる社会」を目指す。

## ⇒ ポケットサポートの5年間の活動

\*ベネッセこども基金による助成事業部分。  
初年度より毎年申請され、毎年採択されました。

2016~18年度

### 自宅療養中の病弱児と学習支援者を 双方向WEBで結ぶ学習支援事業

オンライン学習支援の様子



子どもと学生ボランティアをオンラインで結んで学習支援を実施。適切なツールや支援方法の見極め、研修などの最適化を進めた。学習意欲、闘病意欲を引き出す実践例が他団体に波及。

2019年度

### 病気を抱える子どもの ICTを活用した学ぶ 意欲支援事業

自宅で療養中でも、「学校の仲間と体験をともにしたい!」という気持ちを実現するために、ICTで医療、学校と連携するコーディネーターという新しいモデルを作り実績を積み上げた。

2020年度

### 学校現場における病気の 子どもの支援課題調査と 啓発事業

自宅と学校をICTで結ぶ際、学校の先生方が不安に感じる点を調査し課題をつぶす取り組み。2020年度に実施する調査結果は全国の先例として、役立つことが期待される。

## ⇒ ベネッセこども基金との出会いと今後への期待

### NPO法人立ち上げ前のシンポジウムでの 出会いが助成の申請につながる

まだNPO法人立ち上げ前に初めて登壇したシンポジウムで、事務局の方が話しかけてくれたことがベネッセこども基金との最初の出会でした。私の話に興味をもってくれ、その後活動の見学にも来ていただきました。そんな中で助成募集を知り、「自分たちがやってきたことをそのまま応援してくれる!」と純粋に嬉しかったことを覚えています。

遠くに住んでいる、家に入られることに抵抗感があるなどの療養中の子どもへの直接支援の難しさを、ITという手段を使えば解決できるのではないかと考えていました。ITに強い現事務局長の奥田が加入したこともあり、これはいいタイミングだと申請をしました。ベネッセこども基金から「双方向WEB学習支援事業」の助成を受けたことで、活動を広く発信することができ、興味をもってくれる人が増え、ポケットサポートへの協力や子どもへの支援の方法が広がったことは非常に大きかったです。

### 「人」と「人のつながり」を重視した助成財団に、 団体の共通の課題を一緒に考え、 解決していく存在になることを期待

助成団体同士の交流会に、代表1名だけでなくスタッフと一緒に参加できるのはありがたいです。同じ課題に取り組む他団体の人と出会えること、病気の子どもたちの未来を語り合える同じ志の人たちとつながることは、現場で力を発揮し続けられる原動力となります。また、活動は人がいてこそなので、助成金を人件費に使えるというのはありがたく、「人」を大切に助成財団だと感じています。

この領域の活動を続けていくためには、ファンドレイジング、医療現場との連携、学校現場との連携の大きく3つが課題だと思っています。多くを望みすぎ?!と毎回(笑)、ベネッセこども基金には、共通課題の解決のために、助成金だけでなく、各団体の活動を広く紹介していただいたり、団体間で学び合う環境をつくっていただくなどの支援を、引き続き期待しています。